2016年
6月13日
月曜日

時間と金融・未来の自分からの贈り物、未来の自分への贈り物

藤井　英次　教授（国際金融論）

生命が永続しない個体にとって時間は希少資源だ。一日には24時間しかなく、誰しもいつしか命の終わりを迎える。それ故に時間を無駄にすべきでないとわかってはいても、改めて時間について考えてみる機会はあまりないかもしれない。それこそ「そんな事をしている時間はない」という事だろうか。

経済学では様々な取引について考察するが、その中で時間はどのような意味を持つだろうか。経済学の根底には、需要と供給のバランスが価格を決め、その調整が効率的な資源配分を促すという市場の視点が据えられている。その際、需要側と供給側を分ける境界線のようなものを想像してみよう。例えば国際貿易の場合は、需要側と供給側は目に見える国境という仕切りによって隔てられている。同じ様に需要側と供給側が時間によって仕切られた取引を考えることはできないだろうか。意外に感じるかもしれないが、実はそれはごく身近にあって皆さんも既に関わっている、或いは今後関わる可能性が高いものだ。

誰しも金融という言葉は良く耳にするだろう。金融機関は就職先としても人気が高いし、キャンパスのATMに学生が列をなしている光景をよく目にするが、それはとりもなおさず金融取引がごく身近に行われていることを示している。銀行に預金をして、将来その元利を受け取る。奨学金を借り入れることで進学を可能にし、大学でしっかりと学ぶことで自身の能力や人間性を磨き、生産性を高めて卒業後良い職に就いて奨学金を返済する。或いは、住宅ローンを借り入れてマイホームを購入し、より良い住環境を享受しつつ働きながら少しずつローンを返済していく。これらは全て身近にある金融取引だ。

一見したところ金融取引とは、自分と金融機関等との間の取引に見える。しかしよく考えてみると、奨学金の例では今自分が手にしていない所得を将来自分が手にする所得から返済することを条件に進学を可能にするわけだ。つまり将来の自分から一時的に借り入れをしている事になる。マイホームローンの場合も同様。反対に定期預金の例では、現在使用可能な予算の一部を使う事を諦めて、その代わりに将来の自分の予算を増やしていることになる。つまり将来の自分に融資をしているわけだ。このように考えてみると、金融取引とは現在の自分と将来の自分が取引をする行為であると解釈できる。誰しも人生の各時点で様々な予算の制約に縛られて暮らしているが、金融は時間を超えて自分自身と貸借することを可能にしてくれる。つまり時間で区切られたいくつもの予算制約を、時間を跨いだ制約に取りまとめることで、より柔軟な生涯設計を可能にしてくれる。

多くの学生がそうであるように今貴方が借側にいるのなら、未来の自分に感謝してその借り入れを精いっぱい有意義に活用しよう。せっかく与えられた資源を浪費していると、未来の自分が悲しむはずだ。なぜならその借り入れを返すのは他ならぬ未来の自分なのだから。逆に少しばかり倹約をすることで貸側に立てる時には、将来しっかりと結実する贈り物となるよう未来の自分にエールを送ろう。その地道な投資に、きっといつか自分自身が感謝する日が訪れるだろう。■